

き た い ど い せ き

北井門遺跡 2・3次調査

| | 2 次 調 査 | 3 次 調 査 |
|-------|--|---------------------------------|
| 事業名 | 平成20年度松山外環状道路 松山インター線建設に伴う 埋蔵文化財発掘調査 | 平成20年度県道久米垣生線建設 に伴う埋蔵文化財発掘調査 |
| 調査委託者 | 愛媛県教育委員会 (国土交通省四国地方整備局) | 愛媛県中予地方局 |
| 調査受託者 | (財)愛媛県埋蔵文化財調査センター | (財)愛媛県埋蔵文化財調査センター |
| 場所 | 松山市北井門 | 松山市北井門 |
| 調査面積 | 5,504㎡ | 1,468㎡ |
| 調査期間 | 平成19年度2月1日～3月25日 平成20年度11月17日～3月25日 | 平成20年度11月4日～3月19日 |



遺跡の周辺環境

本遺跡は重信川右岸に位置し、重信川が西から北西へ向きを変え、内川と合流する地点付近に立地しています。北から南へ階段状に形成された重信川河岸段丘の低位段丘面に位置し、内川によって形成された自然堤防上に営まれています。

本遺跡の東側では、北井門遺跡1次調査(平成6～8年度 当センター調査)において、弥生時代後期から古墳時代の竪穴住居が約200棟見つかると、弥生時代から古墳時代を通しての大規模集落の存在が確認されたほか、古墳時代前期の前方後方墳を検出しています。さらに、南東側に位置する井門II遺跡(平成6年度 当センター調査)では、縄文時代後期の土器が多数出土しており、古くからこの地域には人の営みがあったことがわかっています。

調査の概要

今回の調査は、松山外環状道路松山インター線建設と県道久米垣生線建設の2つの事業に伴う埋蔵文化財発掘調査を並行して行いました。名称については、平成6～8年度の松山自動車道松山インターチェンジ建設に伴う発掘調査を1次調査とし、それぞれ2次調査、3次調査としました。2・3次調査では、弥生時代後期(約1800年前)の集落と、縄文時代晩期(約3500年前)の竪穴住居が見つかりました。調査は現在も継続中ですが、対象地全ての調査を終えると、今回確認された遺構と1次調査で確認された集落との関係性も明らかになる可能性があります。



縄文時代晩期の竪穴住居



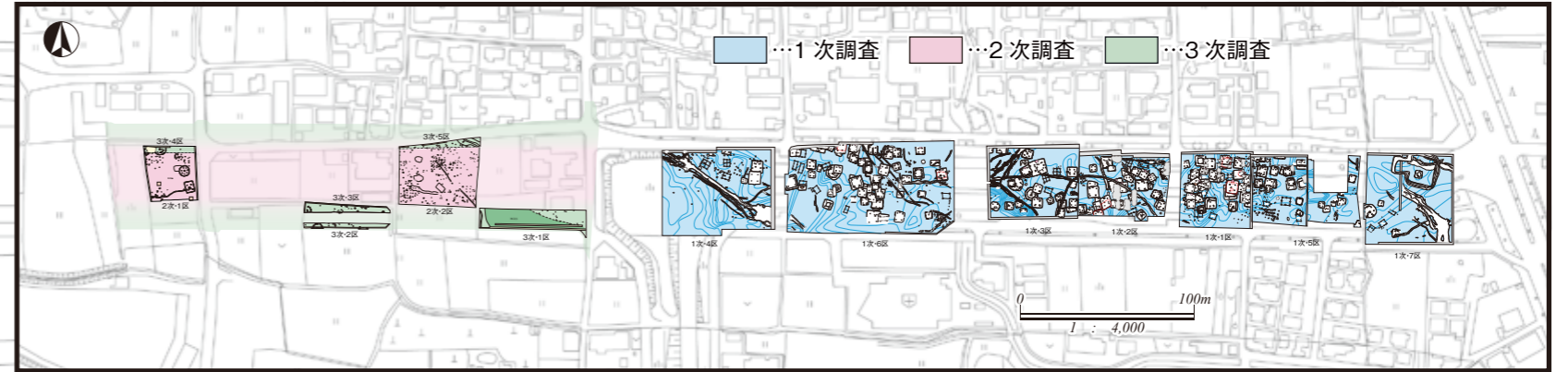
2次調査1区 SI3

中央の炉に向かって溝(SD1)が伸びている様子が分かります



2次調査1区 SI3・4

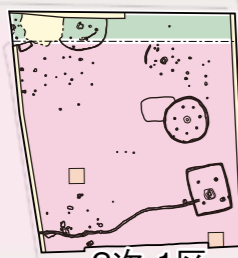
どちらも弥生時代後期の竪穴住居ですが、円形・方形と多様です



3次調査5区 遺構検出状況

白線で囲んだところは柱穴の跡、手前の窪みは昔の川の跡です

3次・4区



2次・1区



2次調査1区 SD1

SD1からは完全な形をした弥生土器が大量に見つかりました

3次・5区



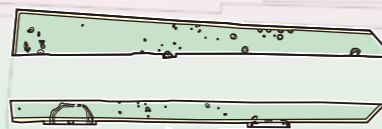
2次・2区



3次調査2区 SI0002

遺構が埋まってゆく途中で土器や石器が大量に捨てられたようです

3次・3区



3次・2区

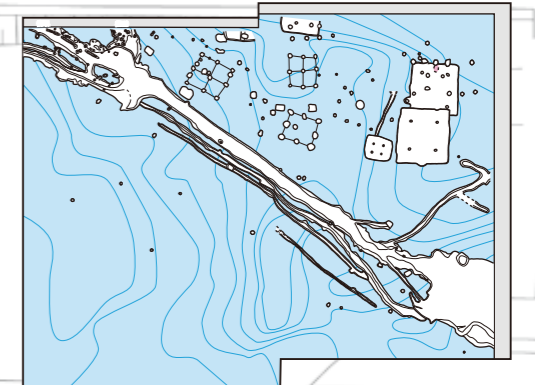


3次調査3区 SK0008

土坑の中には縄文土器が捨てられていました



3次・1区

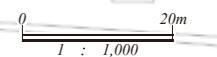


1次・4区



2次調査2区 遺構検出状況

中央の溝(SD2)からは、縄文時代の石棒が見つっています



発掘調査の成果

2 次 調 査

昨年度から続く2次調査では、1次調査でもみられた弥生時代後期の集落に加え、縄文時代後期から晩期(約3500～4000年前)の暮らしが明らかになってきました。

まず注目されるのは、1区での溝の存在です。幅狭の溝には、ほぼ完全な状態で弥生土器が置かれており、単なる廃棄とは考えにくいものです。また、竪穴住居(SI3)の中心部へと溝が続いている点も不思議です。

また2区では、縄文時代後期～晩期の土坑群が注目されます。円形・方形の土坑からは、縄文土器のほか、歯の出土がみられ、当時の墓である可能性も考えられます。後述する3次調査での竪穴住居とあわせ、集落の広がりがかかる具体例として大いに評価できます。

そのほか1区での各種土製品(椅子形?・紡錘車・勾玉・管玉)や2区での石棒など、興味深い資料も次々と出土しています。現在調査中の箇所もあり、さらなる発見も期待できます。



方形の土坑から出土した縄文土器(2次調査2区)

3 次 調 査

3次調査では、縄文時代から古墳時代にかけての人々の生活跡を確認しました。

縄文時代のものとしては、2区西側で検出した竪穴住居(SI0002)があります。遺構の北半分を検出しましたが、中央には炉と思われる窪みも見ついています。炉跡から土器が出土したほか、遺構が埋まってゆく途中で土器や石器が捨てられている様子も確認することができました。この縄文時代の竪穴住居は県内でも珍しい調査例といえます。このほかにも、3区では直径60cm～1mほどの土坑が多数見つかっており、この中にも大量の土器が捨てられていました。これらの土器は縄文時代晩期のものです。



住居の炉跡から出土した土器
(3次調査2区)

弥生時代のものとしては、2区東側で竪穴住居(SI0001)を検出しました。全体形は方形と考えられ、床面からは残りのよい土器が見ついています。



埋没谷検出状況(3次調査5区)
調査区中央の黒い土が谷に埋まった土

この他調査途中の1区では、北西～南東に伸びる谷地形を検出しています。谷の中に流れ込んだ土からは縄文時代～古墳時代の土器や石器が出土していることから、数千年の時間をかけて谷が埋まっていったと思われます。なお、すぐ東隣の1次調査4区においては、調査区西端で溝を検出しており、この溝から東側に集落が広がる状況が確認されています。この溝は今回3次調査1区で検出した谷地形に沿うものであり、谷の東西で集落が営まれる時代・規模に違いが見られる可能性があります。発掘調査を行う上で、こうした昔の環境を復元できることも成果の一つといえます。